十七世紀後半〜十九世紀前半
北インドにおける都城と市場町（村）の形成

佐藤正哲

はじめに
Ⅰ 都城の形成
Ⅱ 市場町（村）の形成
むすび

はじめに

筆者が最近發表した十七世紀後半から十九世紀前半のラージャスターン地方のコーター王國の都城（都市）に關する二本の小論文は、本稿ならびに今後に展開を豫定している筆者の一連のインドの「都市」研究の一部である。このうちの一つは、同じ「カスバー」(qasba) という名稱で呼ばれる「都城」でも、その建設目的や機能において多様な內容をもっていたことを素描し、「都城」研究のイントロダクションをかねたものである。(1) 他の一つは同國ウルマール郡のパータン (Patan) 村が、ジャールラーパータン (Jhalrapatan) 村へと名稱の變更を經て、十九世紀初めに都城ジャールラーパータンの成立へと發展してゆく過程を、その村域 (chak) の變化を中心に百數十年にわたって考察した。(2)

確かに、都城ジャールラーパータンの建設は、國家によって、とりわけ宰相ザーリム・スィング (Zalim Singh, 1739〜

1823）の政治的意圖と政治的經濟的目的とによって、人爲的に「早產」された面がないわけではない。しかしながら、十八世紀後半から十九世紀にかけてのこの地域の史料は、當時數多くの新しい都城や語尾に‘gan;’（市場）をもつ市場町（村）の出現とその形成という事實を示している。したがって、都城ジャールラーパータン建設の背景には、こうした多數の新しい都城や市場町（村）の出現ならびに形成という廣い裾野があり、これをささえた當時の經濟社會の發展があったと考えねばならない。

本稿はこの時代に出現してくる多數の都城や市場町（村）のなかから若干のものをとりあげ、その形成過程を近鄰の村との關係、都城と市場町（村）との關係ならびに後者の建設者などに檢討をくわえつつ論じてゆくことにしたい。なお、こうした都城や市場町（村）の形成過程のなかで、その內部構造とその變化、とりわけこれを構成する諸社會集團の內部構造や各社會集團の相互關係、さらにはこれに政治權力がどのように關わるかといった問題[3]を追求することはきわめて重要なことであるが、ここではスペースの制限もあり、次の研究課題とすることにしたい。

筆者の利用する史料は、ラージャスターン州北部のビーカーネール市にある州立文書館（Rajasthan State Archives, Bikaner）が所藏している舊藩王諸國と英領アジメールの古文書のうち、舊コーター王國と舊ジャーラーワル王國の主として徵稅關係の文書で、いずれもラージャスターン語で記されている。[4]このほかに、一九六一年および一九七一年の「センサス・アトラス」[5]が利用される。

I　都城の形成

コーター王國の地方行政は、「所領安堵」を認められていた他の王國と同樣に、ムガル帝國の郡（pargana）、鄕（tappa, tafa）、村（mauza）といった行政區劃を基本的にはそのまま利用していたが、王國の防衞、行政、徵稅などの必要性から時にはこの行政區劃に若干の手直しをおこない、王國獨自の名稱をもった新しい郡鄕の編成や村落の異動などをおこなっ

ていた。十八世紀に入り、帝國の沒落が明らかになるにつれ、この地方の諸王國はこれまで陰に陽に進めてきた「所領」周邊の帝國領の所領化を公然と推し進め、新たに編入した地域をふくめ、これまでの行政區劃を大きく再編してゆくことになった。コーター王國ではその南半分を占めるほどの大きなバルサーナー郡は、その所領化の產物であり、行政區劃の再編が何度かおこなわれた代表的地域である。

郡の行政府が存在する郡都は、一般に城壁で圍まれた町である都城におかれていたが、郡都が城塞（garh）におかれている郡もあり、その場合には例えば「都城マドカル城」（Qasba Madhkargarh）というように、都城はその城塞名をつけて呼ばれていた。所屬する村數が多いコーター（ナンドガオン〈Nandgaon〉）郡やバルサーナー（Barsana）郡などは、郡と村とのあいだに鄕という行政區劃をもち、一つの鄕に三十～六十箇村が所屬していた。こうした複數の鄕をもつ郡の場合には、郡都がその管轄區域のなかにある鄕の行政府は郡都と同じ都城におかれていたが、他の鄕の行政府は都城におかれるものもあれば、大きな村におかれるものもあった。

ナンドガオン（コーター）郡の當時の五鄕のうち、ナンドガオン鄕の行政府は郡都でもある都城ナンドガオンにおかれていたが、アランドケーラー（Arandkhera）やケートーン（Kethon）、カンワース（Kanwas）、後に論じるディーゴード（Dighod）の四鄕の行政府は、いずれもその鄕と同名の大きな村におかれていた。これらの村は、後に見るようにS・一八一〇（A. D. 1753）年代に都城となっている。

バルサーナー郡の二〇餘りの鄕のうち、S・一七七〇～一七八〇（A. D. 1713～1723）年代にその鄕の行政府が鄕と同名の大きな村におかれていたのはハリーガル（Harigarh）、クーンディー（Kundi）、カークルニー（Kakurni）の三鄕で、その他はすべて都城におかれていた。このうちハリーガル村はS・一七八一（A. D. 1724）年までに、[6] クーンディー村はS・一八一一（A. D. 1754）年までに、[7] カークルニー村はS・一八二四（A. D. 1767）年までに、[8] いずれも都城となっている。

また、なかには郡鄕の再編成の過程で、村から都城に成長して新しい鄕の行政府となった都城パンワール（Panwar）が

あり、S・一七九八（A.D.1741）年までにはそれまで所屬していたデーイケーラー（Deikhera）郷の都城デーイケーラーをふくむ一部の村をその管轄下にくみいれている。(9) S・一七八三（A.D.1726）年に二箇村から土地をえて形成された都城デランプル（Delanpur）は、S・一七九八年にはデランプル郡の郡都として、それまで所屬していたビナーイガー（Binaiga）郡の大半の村を同名の都城とともに、その管轄下においている。(10) スィング（M.P.Singh）氏は、ムガル時代の都城の數を都城を郡都であると想定して帝國の郡の數から帝國全體の都城の數をわりだし、その數を西暦一六四七年に四、三五〇、同一七二〇年に四、七一六と推定している。(11) しかし、バルサーナー郡の場合を例にとってみると、史料の入手できない十七世紀は別としても、十八世紀初めにはこの郡だけでも二十に近い數の都城が存在していたことになる。しかも、都城の數は、十八世紀を通じて増加していたことに注意しておかなければならない。したがって、スィング氏の推計は少なくとも十八世紀については妥當しないといえる。

いずれにせよ、新しい都城の出現は十八世紀前半にその先蹤をみるが、その本格的展開は十八世紀後半から十九世紀にかけてである。この時期の新しい都城をその前身である村の機能においてみると、次の四つないし五つのタイプに分けることが出來るようである。

一　もともと郷の行政府がおかれていた大きな村が、成長して都城になったもので、ナンドガオン郡のアランドケーラー、カンワース、ケートーン、ディーゴードなどがこれに該當する都城である。

二　村が都城へと成長し、これまで郡都であった都城にかわって新しく郡都になるもので、都城アートーン（Aton）と都城バーラーケーラー（Balakhera）にかわってそれぞれクンジョール郡およびアンター郡の郡都となった都城クンジョール（Kunjor）や都城アンター（Anta）などがその代表的事例である。

三　「市場」（gani）の語尾をもつ市場町（村）の成長で、初めから都城として建設されるものと、市場村から都城（市場町）へと成長してくるものがあった。都城ウメッドガンジ（Ummedganj）は前者の事例で、複數の村から土地を得

て「都城」として建設され、また後者の事例である都城ガネーシュガンジ（Ganeshganj）もその成り立ちは複數の村から土地を得てのことであるが、この場合は市場「村」として建設されている。

四　城塞村の都城への成長であるが、それは城塞の擴大によるのではなく城塞をもった村の「村」部分が「都城」へと發展したものである。それは城塞によってその安全が保障された城塞「村」が、その商工業活動を發展させたことによるもので、「徵税臺帳」などにみる住民構成からそれを知ることができる。都城ラージガル（Rajgarh）、都城ムカンドガル（Mukandgarh）、都城バンワルガル（Bhanwargarh）などはこうした城塞をもった都城である。

五　新しい都城のなかでは、このタイプの都城がもっとも多く見られる。すなわち、郡や鄉の行政府がおかれた都城でもなければ、軍事的役割を果たすために形成された都城でもなく、またその「徵税臺帳」の内容をみると商人ないしは職人・手工業者が多く、後者の場合には捺染工、織布工などの割合がかなり多い都城もあった。その都城域も他と比べるとかなり大きく、コイーラー（Koila）、バドウォー（Badwo）、ギルダルプラ（Girdharpura）などの都城は、後にも述べるように一萬ビーガー以上の都城域をもっていた。

以上のように、新しく成長してきた都城をその前身の村の機能にさかのぼって分類し、成立した都城の内容をみてきたが、その内容からみると都城形成の主要な要因がいずれも經濟的なものによるのではないかと推察される。新たに都城となり郡都とされた都城、また鄉の行政府がおかれていたにも拘らず、ながらく村であった都城なども、その住民構成に統治階級であるバラモンをかなり多く見ることができ、政治的都市の性格を示しているが、同時に商人あるいは職人・手工業者も多く、生産者的都市の性格をももっている。(12) しかも、これらの新しい都城は若干の地域的偏りはあるにせよ、ほぼコーター王國全域にわたって郡鄉に少なくとも一つは出現しており、このことは當時の經濟的社會的發展を前提にして考えなくては理解できないのではあるまいか。

ところで、新しく形成されてくる都城には、すでに言及してきたように二つの對照的な形成過程があった。一つは複數

の村から土地を得て都城が建設されるもので、さきにみた都城デランプルや市場町ウメッドガンジなどである。他の一つは村が長い時間をかけて都城へと成長してくるもので、その間に多くの分村を生み新村として分離・獨立させつつ、また時にはそれを再び吸收しながら、都城形成に至る道である。もちろん、都城形成後もそうした分村創出の過程が繰り返されてゆくのは後にみる通りである。この時期の新しい都城の形成は、こうした後者の過程によるものが壓倒的に多く、前者の場合は一般的には新村の建設に多くみられ、[13] 都城についてはきわめて少ない。ここでは後者の都城形成の過程を檢討することにして、前者の都城建設については、次節の「市場町（村）の形成」においてみることにしよう。

ここではコーター郡（S・一七七二年からナンドガオン郡に名稱が變更される）のディーゴード（Dighod, Digod）村の都城形成の過程を事例にとりながら、當時の都城形成一般を論じて行くことにしたい。この村をとりあげるのは、この村に關する史料がかなり早い時期から比較的多く得られ、また分村の創出と新村の形成がそれほど多くないため、地圖上に都城の形成過程を圖示して行く際の煩雜さを比較的さけることができると考えたからである。

表1は、コーター郡およびナンドガオン郡に所屬する都城と村の徵稅關係の記錄を記したタクスィーム（taqsim）と呼ばれる文書を利用して、ディーゴード村の都城形成に關わる必要な事項を掲載したものである。左端に記したヴィクラム・サンバット暦（Sと略記）は、いずれも筆者が利用したタクスィーム文書の年度であるが、[14] 記載事項の重複している年度については、年度の記載を省略している。**圖版1**（**A**）～（**E**）は、一九七一年の「センサス・アトラス」の現ディーゴード郡の關連箇所をコピーし、これに**表1**の內容を書きこんで、ディーゴードの村から都城への發展過程ならびに都城形成後までを、村域および都城域の變化に焦點をあてながら、五つの年度に分けて圖示したものである。

S・一七一九（A.D.1662）年の記錄によれば、同年ディーゴード村の村域は一八、一一〇ビーガー[15]で、この年までにカンワルプラ村（村番號一〇九）三、〇〇〇ビーガーとカリャーンプラ村（同一一四）四、〇〇〇ビーガーを分離・獨立させているので、この村のS・一七一八年以前の村域の廣さは少なくとも二五、一一〇ビーガーである。

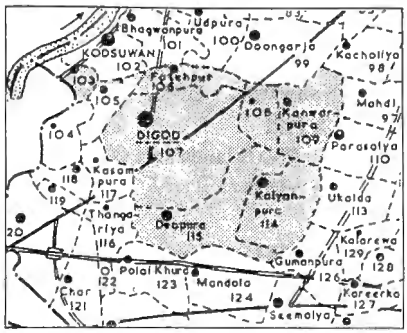
表1　Dighod (Digod)

年度(S)	村／都城	村(都城)域(ビーガー)	分村名	備考（括弧内は村番號）
1719	村	18,110	Mandoli	既に Kanwarpura (109), Kalyanpura (114) を創出
1751	村	17,810	Mandoli	Jagpura, 後の Mandawari (103) に 300 ビーガーを追加
1763	村	17,810	Mandoli	
1777	村	「検地」(S.1774)	Mandoli	検地 14,675 ビーガー，（可耕）荒蕪地 1,156ビーガー，耕地價 17,795ルピー
1805	村	14,351	Mandoli	S.1787年に Fatehpur (106) を創出
1812	都城	「検地」16,110		
1847	都城	16,110		S.1828年に Ummedpura (108), S.1844年に Deonagar, 後の Deopura(115) を創出。Mandola (124) から400ビーガー
1851	都城	9,633		
1865	都城	「検地」9,995 (S.1864)		S.1862年 Deopura から1,000ビーガー
1883	都城	9,995		

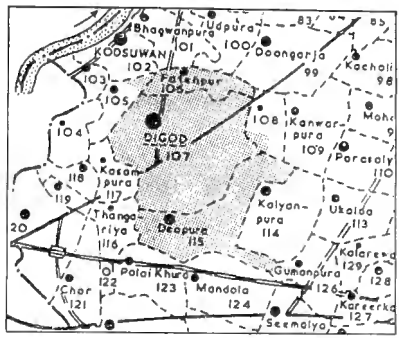
S・一七一九年その村域八〇〇ビーガーのジャグプラ村は、後に（S・一七五一年までには）マンダーワリー村（同一〇三）と改名されているが、その擴張に際しては、ディーゴード村やショーリー村（同一〇五）から土地を得ているので、この村の建設にもこれら二箇村が密接に關わっていたのではないかと推測される。もっとも、この村の記録はS・一六九一（A.D.1634）年にまでさかのぼることができるから、村の建設もそれ以前のことになろう。「センサス・アトラス」ではディーゴード村とこの村との閒にはショーリー村が存在し、兩者は地理的に接するところはないが、S・一七五一（A.D.1704）年までにディーゴード村はこの村に三〇〇ビーガーの土地を分與しているから、當時ディーゴード村の村域はこのマンダーワリー村にまで回廊のような形でのびていたものと考えられる。これを圖示したのが**圖版1—(A)**および同**(B)**である。なお、こうした地圖からみると、この村はディーゴード村から分離・獨立した村であったと推察される。

次に**圖版1—(B)**は、カンワルプラ村（同一〇九）と

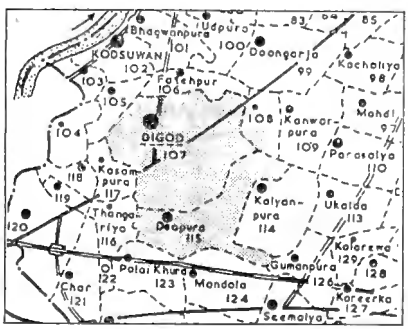
(A)—S.1718年以前



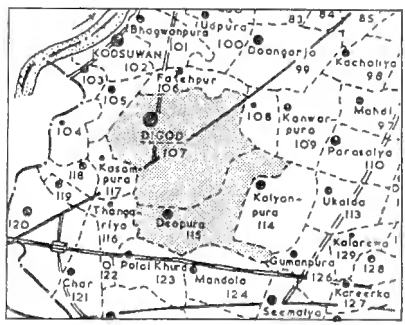
(B)—S.1719年



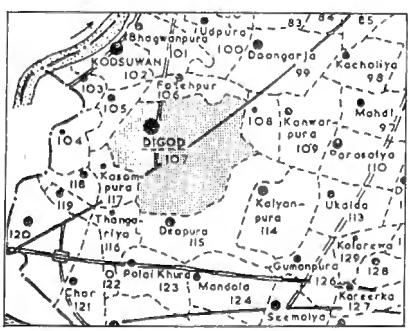
(C)—S.1790年



(D)—S.1828年



(E)—S.1862年以降



圖版 1

カリャーンプラ村（同一一四）を分離・獨立させた後のディーゴード村である。當時のカンワルプラ村の領域は、地圖上の自己の村域だけでなく、後に建設されるウメッドプラ村（同一〇八）の村域の大部分をふくむ地域である。ウメッドプラ村は、都城ディーゴードとカンワルプラ村から土地を得て建設されたが、その村域一、三八九ビーガーにしめる都城ディーゴードの土地はわずか八五ビーガーにすぎない。この地圖でディーゴード村からウメッドプラ村に小さく突出している部分は、筆者の勝手な判斷で線引きしたこの八五ビーガーの土地である。

ディーゴード村の領域は、カンワルプラとカリャーンプラの二箇村の合計七、〇〇〇ビーガーが減って一八、一一〇ビーガーとなる。分村のマンドーリー村は、分村としてはS・一八〇五（A. D. 1748）年の記錄を最後に史料からその姿を消してしまい、「センサス・アトラス」にもその名を見いだすことはできない。なお、S・一八四四（A. D. 1787）年に建設されたデーオナガル村、後のデーオプラ村（同一一五）の南に鄰接するマンドーラー村は、男性名詞ないし「大きい」を意味する語尾をもっており、同じく女性名詞ないし「小さい」を意味する語尾をもったこの分村マンドーリーとは對をなす關係にあったのではないかと考えられる。そうであるとすれば、分村マンドーリーがデーオプラ村の位置にあってもおかしくはないわけで、デーオプラ村建設の過程でその一部として吸收されてしまったのかもしれない。この村の建設者はナードナー（Nadna）村[16]の村長デーオという者で、自己の名を村名につけたのは明らかである。

ディーゴード村もコーター王國全土にわたっておこなわれたS・一七七四（A. D. 1717）年の「檢地」（土地調査）を受け、村域一七、七〇〇ビーガー、そのうち耕地一四、六七五ビーガー、可耕荒蕪地一、一五六ビーガー、耕地價（耕地で査定された地租高）一一、七九五ルピーと記錄されている。S・一七八七（A. D. 1730）年ファテープル村（同一〇六）が、村域三、三四九ビーガーをもって建設され、S・一七九〇（A. D. 1733）年に分離・獨立したので、ディーゴード村の村域は一四、三五一ビーガーに縮小する。これを示したのが、**圖版1**—(**C**)である。

ディーゴード村が都城になった正確な年度はわからないが、S・一八一一年前後、遅くともこのS・一八一二（A. D.

1755）年には都城となっており、都城となって初めて創出したのがS・一八二八（A.D.1771）年のウメッドプラ村（同一〇八）である。その村域一、三八九ビーガーの大半はカンワルプラ村から得たものであったことは既に述べた通りである。「センサス・アトラス」でみるカンワルプラ村の領域は、この年度以降のことで、以上を圖示したのが、この**圖版1—(D)**である。

S・一八四四（A.D.1787）年にはデーオプラ村（同一一五）が、さきのナードナー村の村長デーオという者によって村域五、〇三三ビーガーをもって建設されている。そのうち都城ディーゴードから九割以上の四、六三三ビーガーを、マンドーラー村（同一二四）からは四〇〇ビーガーを得ている。これで都城ディーゴードの都城域は九、六三三ビーガーになるが、S・一八六二（A.D.1805）年にデーオプラ村が一、〇〇〇ビーガーの土地を返還したので、都城域は一〇、六三三ビーガーとなる。S・一八六四（A.D.1807）年の「検地」は、この王國のかなり廣い地域に對しておこなわれているが、この「検地」の結果、この都城域はさきの「臺帳」上の記録よりも少ない九、九九五ビーガーであった。**圖版1—(E)**は、このS・一八六二年の都城域を示したものである。

これでもって都城ディーゴードの形成と分村ならびに新村の創出活動は、一應終ることになる。「センサス・アトラス」に記載されている都城ディーゴード周邊の村で、この當時まだ形成されていなかった唯一の村が、ファテープル村（同一〇六）の北側で鄰接するバグワーンプラ（Bhagwanpura）村（同一〇一）である。この村の建設は、都城ディーゴードに鄰接する村ないしはその周邊の五つの村から土地を得ておこなわれているので、これらの村の領域は大きく變動しているが、都城域そのものには異同はなく、すでに最終的に確定している。しかし、次に述べるこれら五箇村の境界は、このバグワーンプラ村の建設によって決まったのであるから、**圖版1—(E)**を「S・一八六二年以降」としたのは、都城ディーゴードの都城域については正しいが、これら村落の位置關係については不正確な表現である。都城ディーゴードとこれら周邊の村をふくめた相互の位置が、つまり「センサス・アトラス」にみる今日の村の位置關係が確定するのは、バグワ

ーンプラ村が建設されたS・一九〇八（A. D.1851）年のことである。このことは、この村の建設をもって、都城ディーゴードとその周邊に今日存在している村がすべて出揃ったことを意味している。

バグワーンプラ村は、この地域ではもっとも遲く形成された村で、アトラーリヤ（Atraliya）村（同八一）から三八〇ビーガー、ショーリー（Sholi）村（同一〇五）から一〇〇ビーガー、ウダイプラ（Udaipura）村（同一〇〇）から四四九ビーガー、ファテープル（Fatepur）村（同一〇六）から五〇〇ビーガー、コードスワーン（Kodswan）村（同一〇二）から一、〇七八ビーガーを得ている。この村の建設者についてはわからないが、このように複數の村から土地を得て建設されるのが、當時の村落の一般的な建設方法であった。ディーゴード村が都城として形成されてくる過程は、また都城の發展過程とともに、つぎつぎと分村を生み、これを新村として分離・獨立させてゆく過程でもあった。これは當時の都城形成の一般的傾向であり、單に都城ディーゴードの形成にのみ限られるものではなかった。こうした分村を生み、新村として分離・獨立させてゆくような村あるいは都城は、當時の平均的な大きさの村と比較してみるとかなり大きな領域をもっていた。

別の機會に檢討したように、當時の村の平均的な大きさは二、〇〇〇ビーガー前後から三、〇〇〇ビーガー弱であった[17]のに對し、ここでいう大きな村や都城は、六、〇〇〇ビーガーから一三、〇〇〇ビーガーの廣さで、都城ディーゴードは別にしても、マーングロール郡のコイーラー（Koila）、バーラーン郡のバドウォー（Badwo）、ラーイープル郷のギルダルプラ（Girdharpura）、カークルニー郷のサルタール（Sarthal）などは一〇、〇〇〇ビーガー以上の領域をもっていた。このうち、二箇村を分離・獨立させていること以外は史料不足でわからないバドウォー村は別として、コイーラー村は分村四、ギルダルプラ村は分村六、サルタール村にいたっては八箇村の分村をもっていた[18]。これらの分村の多くは、時とともに新村として分離・獨立していったことはいうまでもない。

ここでは、郡都のなかで當時最大級の都城域をもっていたバーラーン郡の都城バーラーンのS・一八六五（A. D.1808）年の記錄[19]をみておくことにしよう。S・一七七四（A. D.1717）年以前におこなわれたものと考えられる土地調査によれ

ば、都城バーラーンの廣さは三二、〇〇〇ビーガーで、S・一七七四年の「檢地」では四二、三〇八ビーガーと領域を増加させている。これは前回の土地調査が「指出」などによって不正確だったため、今回の「檢地」によって隱畑・隱田などが發見され、耕地の增加が記錄されたのか、都城周邊の荒蕪地の開墾が進み、その土地が都城域に編入されたのか、あるいは都城バーラーンの發展と擴大が周邊の村落を都城域のなかにくみこんだのか、ここではわからない。

しかし、S・一七七四年の「檢地」以降、都城バーラーンは九つの村に土地の廣さ合計二四、五六一ビーガーを與えて分離・獨立させ、さらに近年あわせて四、〇〇〇ビーガーの土地をもつ新村二つを誕生させている。したがって、「臺帳」の上ではバーラーンの都城域は一三、七四七ビーガーになっているはずであるが、實際の「檢地」ではS・一八五二（A.D.1795）年に五、二九七ビーガー、S・一八六五（A.D.1808）年には六、〇七六ビーガーで、「臺帳」と實際の調査とでは大きな開きがあった。

都城バーラーンとその周邊の村については、「センサス・アトラス」とこのS・一八六五年の記錄は一致し、また都城バーラーンはこれ以降新村を生むこともなく、これによって都城バーラーンの新村を創出する活動は一應終了したことを示している。

筆者は別の機會に、その都城域が二、〇〇〇ビーガーとなり一〇〇年以上にわたって分村を一つも生みだしていない王都コーター（ナンドガオン）を、「完成した」あるいは「成熟した」都城といった表現で呼び、その內容をどのように考えて行くかは今後の課題であるとしておいた。[20] この都城バーラーンやさきの都城ディーゴードなどは、さしずめこの種の都城といってよいであろう。しかし、筆者が述べたのは、あくまでも分村や新村を生みだす活動であって、そうした活動が終ったからといって都城の發展が止まってしまうということではない。都城が自己の領域內につぎつぎと分村を生み、新村を分離・獨立させながら、都城域を小さくしてゆくことは、都城の一つの發展の形態であり、都城の發展を示す一つの現象形態にすぎない。

次節では、市場町（村）の形成について考察するが、それは都城の發展の別の形態であり、こうした都城のさらなる發展の形態との關連で論じられることになる。もちろん、こうした發展は本質（内部構造）の變化を伴うものと考えられるが、冒頭で述べたようにこの點については別稿で扱うことにしたい。

II　市場町（村）の形成

ところで、以上みてきたような都城の形成ほどに目立つ存在ではないが、十八世紀後半から語尾に「市場」（gani）をもつ市場町（村）の名が史料に見られるようになる。そのもっとも早い記録は、S・一八二二～二五（A. D. 1765～68）年に成立をみるアトロー（Atro）郷の市場町ガネーシュガンジである。[21] もっとも、これ以前に市場町（村）がなかったわけではない。都城では一般に週市（hat）が開かれており、都城カーンプル（Khanpur）に隣接するチャーンドケーリー（Chandkheri）村や王都コーターの川向こうにある都城パータン（Patan）は、歳市（mela）が開かれることで著名な市場村（町）であった。[22] しかし、市場町（村）が、語尾に「市場」という獨特の用語をもって登場するのはこの時期になってであり、以前にはまったく見られないことである。こうした市場町（村）は、都城ガネーシュガンジ（Qasba Ganeshganj）あるいはキッシャンガンジ村（Mauza Kishanganj）というように記されており、前者を市場町ガネーシュガンジ、後者を市場村キッシャンガンジというふうに呼ぶことにしたい。

市場村（町）の形成には、既存の村が市場村へ發展して形成される場合と、一つの村ないし複數の村から土地を得て新しく建設される場合とがあった。

前者の事例は、さきの市場町ガネーシュガンジで、都城アトローの分村から市場町（都城）に成長したものであるが、分村がいつ生み出され、それがどのようにして市場町になったのかは史料不足でわからない。ジョールパー（Jolpa）郷の市場村キッシャンガンジ（Kishanganj）もまた分村から發展したもので、史料の上では都城ジョールパーの分村マッドリ

ー（Madhri）として、S・一七八一（A. D. 1724）年にまでさかのぼることができる。これからS・一八五七（A. D. 1800）年までが分村で、S・一八六五（A. D. 1808）年の記録では市場村となっている。[23] 同じような形成過程を經てきたものとして、S・一八五〇（A. D. 1793）年に成立したバーンストゥーニー（Bansthuni）郷の市場村チャッタルガンジ（Chhatarganj）がある。その前身はダーバル（Dabar）村で、すでにS・一七八一（A. D. 1724）年の記録にその名が見られる。[24]

後者の事例としては、王都ナンドガオンの都城域の西にロージャリー（Rojhari）村から土地を得てS・一八四二（A. D. 1785）年に建設されたラーイープル郷の市場村ドーラットガンジ（Daulatganj）がある。[25] また同じS・一八八八（A. D. 1831）年に建設されたバーンストゥーニー郷の市場村小ラームガンジ（Ramganj-khurad）と市場村大ラームガンジ（Ramganj-bujarkh）は、それぞれ前者は一箇村から、後者は二箇村から土地を得ている。[26] 三箇村から土地を得て建設されたのがバロード郡の市場村キッシャンガンジで、S・一八八七（A. D. 1830）年郡都バロードの西郷りに、[27] またイターワー（Itawa）郡の市場村ガネーシュガンジ（Ganeshganj）は、S・一八四一（A. D. 1784）年郡都イターワーの南に郷接する村など六箇村から土地を得て建設されている。[28] 市場町として王都の都城域の南にS・一八三一（A. D. 1774）年に建設されたウメッドガンジ（Qasba Ummedganj）は、四箇村から土地を得ている。[29]

ここで市場村（町）の名稱について、簡單な考察を加えておきたい。市場村（町）が新しく建設される場合は別として、分村ないし本村から發展して市場村（町）が形成される場合、その名稱は舊村落の名前ではなく、新たに名前がつけられており、しかも新しく土地を得て建設された市場村（町）と同樣な名前をもっている。

既にみたように、都城ジョールパーの分村から成長した市場村キッシャンガンジの舊名はマッドリーであり、バーンストゥーニー郷の市場村チャッタルガンジの前身はダーバル村であった。アトロー郷の市場町ガネーシュガンジは、都城アトローの分村からの發展であるが、その分村名は記されていない。なお、この市場町は十九世紀初めには衰微しはじめ、S・一八五七（A. D. 1800）年からS・一八八三（A. D. 1826）年の史料では「ケールリー村またの名ガネーシュガンジ」

(Mauza Kherli urf Ganeshganj) と記され、S・一九一二(A. D. 1855)年には都城アトローの分村(majar)とされている。「センサス・アトラス」では、現アトルー(アトロー)郡の郡都アトルーに郷接する村で、その名もケールリーガンジ(Kherliganj)というかつての村名を合成した名稱で殘っている。

村から發展した市場村(町)や土地を得て新たに建設される市場村(町)が、似たような名前をもっており、ここで取り上げる市場村(町)だけでも同じ名前のものが三組もある。こうした市場村(町)の意味や由來を考えてみることは、市場村(町)の形成や建設ならびにその性格を理解する上で重要なことではないかと思われる。

市場村ガネーシュガンジ(アトロー郷、イターワー郷)のガネーシュ(ガネーシャ)は、象の姿をした富と繁榮を象徴する神であり、キッシャンガンジ(ジョールパー郷、バロード郡)のキッシャンはクリシュナ神の別名で、この地域の人々に深く浸透しているクリシュナ神信仰を象徴する名稱である。チャッタルガンジ(バーンストゥーニー郷)は、神の「傘」あるいは「保護」(chhatar)のもとに市場村(町)の繁榮とその安全を願い、ドーラットガンジは、その建設と發展が大いなる「富」(daulat)をもたらしてくれることを祈念しての命名であろう。

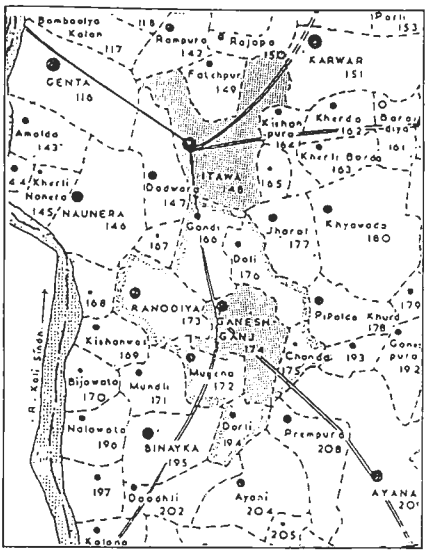
また、大(bujarkh)小(khurad)で區別する二つの市場村ラームガンジ(バーンストゥーニー郷)のラーム(ラーマ)は、敍事詩『ラーマーヤナ』のラーマ王の名前であるが、クリシュナ神と同様にヴィシュヌ神の化身である。もっとも、この市場村はコーター國王ラーム・スィングⅡ世(在位S・一八八四〜一九二二)の時代に建設されており、ウメッドガンジ(コーター郡)の建設が國王ウメッド・スィング(在位S・一八二七〜一八七六)の治世と重なっているから、いずれも國王の名前を冠したものであろう。とりわけ、王都のお膝元に都城として建設された市場町ウメッドガンジは、市場町發展の「希望」(ummed)もさることながら、國家の肝煎りで建設されたように思われるので、なおさらこれに國王の名前が冠せられてもおかしくはないと思う。なお、市場村ラームガンジは、その大小で區別するのが煩わしかったためか、それと同時にその建設者と考えられる村長が解職されたことによるのか、大ラームガンジは後にキッシャンガンジに名稱を變えてい

る。それとともに、小ラームガンジの方は、「小」がなくなり、ラームガンジになっている。

ヒンドゥー教徒の名前には神の名前が多いから、市場村（町）の名前にその建設者の名前をつけたところもあったのであろう。さきの市場村大ラームガンジは、神の名前ではあるが、同時に後に述べるように建設者と考えられる村長の名前でもある。いずれにせよ、ここにみられる市場村（町）の名稱には、神の名や富、繁榮を意味するような言葉が使用されており、市場村（町）の命名にあたって建設者などが縁起をかつぎ、繁榮を祈っておこなったことによるのであろう。

それでは、市場村（町）はどのようにして建設されたのであろうか。圖版2はイターワー郡の市場村ガネーシュガンジを中心に、この建設に土地を提供した周邊の村の位置關係を知るために、一九七一年の「センサス・アトラス」の現ピーパルダー（Pipalda）郡の一部を掲げたものである。市場村ガネーシュガンジ（村番號一七四）は、S・一八四一（A. D. 1784）年にゴーンディー村（同一六六）をはじめとして周邊六箇村から土地七、〇〇三ビーガー、つまりゴーンディー村から三、〇〇一ビーガー、ドーリー村（同一七六）とチャーンダー村（同一七五）から各一、〇〇一ビーガー、ラノーディヤー村（同一七三）から五〇〇ビーガー、ムゲーナー村（同一七二）から一、〇〇〇ビーガー、ドールリー村（同一九四）から五〇〇ビーガーの土地を得て建設されている。この市場村の發展は早く、S・一八四七（A. D. 1790）年には市場町となっている。

この市場村が誰によって建設されたかは明らかではないが、その建設に際して土地の提供がラノ



※太線内は、ガネーシュガンジを建設した6箇村
※■部分は、市場村（町）ガネーシュガンジと都城（郡都）イターワー

圖版2

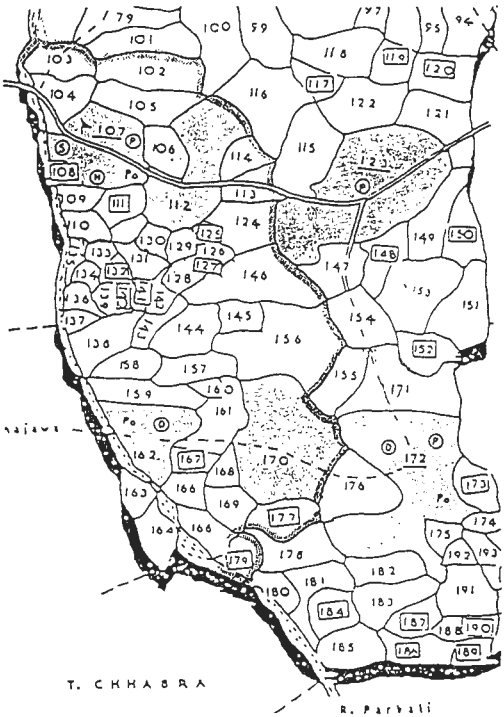
ーディヤー村についで多いゴーンディー村は、その北鄰りが都城（郡都）イターワーであり、この市場村建設が都城イターワーとの經濟的ないしは商業的關係やその影響によるところが多いと思われる。この市場村の史料は比較的多いにも拘らず、建設者の名前がわからないということは、國家によってか、あるいは比較的多數の者（場合によっては村落共同體）によって建設されたのかもしれない。もちろん、都城イターワーの商人たちの關與も推定されないわけではないが、六箇村からの土地を得て建設されるということは、これらの村の土地所有者層、當時としては一般に村長層の關與が指摘されねばならないであろう。

バーンストゥーニー郷の市場村大ラームガンジの建設は、近くの村の村長によっておこなわれたようである。當時、新村が建設されると、その村長職（pateli）はその建設者に與えられるのが一般的であったが、この市場村の村長職も近くのカームター（Kamtha）村の村長ラーム・ワグス（Ram Wags）に與えられている。[30] しかし、この市場村建設の六年後のS・一八九四（A. D. 1837）年、理由はわからないが解職され、その村長職（biswa bis）は三人の者に與えられている。かれがその建設者であれば、自分の名をこの市場村につけたことは十分に考えられるところである。

また、S・一八四二（A. D. 1785）年にロージャリー（Rojhari）村から土地を得て建設されたラーイープル郷の市場村ドーラットガンジの建設者は、金融商人（shah）のタイトルをもつダーナット・ラーイー（Danat Rai）、ラチマン・ダース（Lachhman Das）、サーラグ・ラーム（Salag Ram）、ダーナット・ラーイーの息子バッラブ・ダース（Balabh Das）である。[31] なお、これに先立つS・一八三九（A. D. 1782）年、ダーナット・ラーイーとラチマン・ダースは、商賈仲間と考えられるナンド・ラール（Nand Lal）およびチュットラ・ブージ（Chutra Bhuj）とともに、ナンドガオン郡の都城ナーンター（Nanta）の公園（bag）にタンク（Kund）を建設して行者（atit）を置き、その扶持に國家から鄰村サガットプラに二〇ビーガーの土地を與えられている。[32] 同年かれらは、同じ郡のアーワリー（Awali）村にもタンクを建設し、また寺を建立して行者（atit）を置いている。ダーナット・ラーイーとラチマン・ダースの名前は當時の史料に頻出しているので、か

なり著名かつ富裕な商人であったと考えられる。かれらは現北部州（U.P）のムホーバ（Mahoba）の出身であるが、いずれもシャーのタイトルをもつ祖父ゴーピーナート（Gopinath）と父ハルナート（Harnath）、バッラブ・ダースからすれば曾祖父および祖父の名前とともに記され、その血縁關係を明示しているところから判断すると、かれら一族のコーター在住はかなり古いのではないかと推察される。

ところで、さきの市場村大ラームガンジが存在するバーンストゥーニー郷には、他に二つの市場村があったことは既にみてきたが、この狹い地域に市場村が三つも形成・建設されてくる背景には、どのような要因があったのであろうか。これら三つの市場村の形成と發展の過程ならびに新村の建設狀況などをみておくことにしたい。



※太線内がバーンストゥーニー（Bansthuni）郷
※▩部分は、市場村（町）、都城、城塞（その名稱については本文の關係箇所を參照）

圖版 3

圖版 3 は、一九六一年の「センサス・アトラス」の現キッシャンガンジ郡から舊バーンストゥーニー郷の部分を擴大して示したもので、太線で圍んだ部分がその地域にあたる。なお、さきに述べたように、大ラームガンジは今日キッシャンガンジに、「小」ラームガンジはラームガンジに名稱が變っている。

これら三つの市場村について、これまで述べてきたことを簡潔にまとめると、まず市場村チャッタルガンジ（村

番號一七〇）は、ダーバル村から發展したもので、S・一八五〇（A. D. 1793）年に市場村になったこと、同じラームガンジの名稱をもつ大小の市場村は、ともにS・一八八八（A. D. 1831）年に建設されたが、その土地は小ラームガンジ（同一四五）がビラース村（同一四六）から、大ラームガンジ（同一〇七）はラーニー・バロード村（同一〇四）とディーロード村（同一〇八）の二箇村から得たことなどである。

市場村大ラームガンジは、建設された當時の領域は三、八一四ビーガーであったが、S・一八九二（A. D. 1835）年には九、三三〇ビーガーとなり、大きく擴大している。**圖版3**は今日の地圖であるから、まずは建設された當時のおおよその領域、つまり村と村の位置關係を確認しておきたい。市場村大ラームガンジの南に鄰接するラーラープラ村（同一一一）は、S・一八六四（A. D. 1807）年カームター村（同一一〇）から分離・獨立しているから、カームター村のもともとの領域はこのラーラープラ村をふくむ地域で、大ラームガンジに鄰接していたことになるが、この時點ではこの市場村は生まれていないから、ディーロード村（同一〇八）と境を接していた。また、ヒーラープル村（同一〇六）は、S・一九〇七（A. D. 1850）年この鄕の行政府のおかれている都城バーンストゥーニー（同一一二）から生まれた村である。したがって、この大ラームガンジが建設されたとき、その東側は全面がこの都城と鄰り合っていたことになる。

この市場村の領域的擴大は、その土地のかなりの部分をかつて母村であったラーニー・バロード村（同一〇四）から得たことによる。その後キッシャンガンジに名稱を變え、今日ではかつてのバーンストゥーニー鄕よりもはるかに廣いキッシャンガンジ郡の郡都になっている。

市場村小ラームガンジ（同一四五）は、名前の紛らわしい大ラームガンジが今日では郡都キッシャンガンジになり、互いに大小で區別する必要がなくなったためか、市場村ラームガンジになっている。この市場村も母村ビラース（同一四六）からわずか一、九四四ビーガーの土地を得て建設されたが、S・一八九二（A. D. 1835）年にはその領域を七、四八六ビーガーに擴大している。しかし、十九世紀後半以降その發展は鈍化したのであろうか、**圖版3**でみるとその領域は縮小し

ているようである。

市場村チャッタルガンジ（同一七〇）はダーバル村からの發展である。S・一七七四（A. D. 1717）年の「檢地」では、七、七六四ビーガーという廣大な領域をもっていたが、九〇年後のS・一八六四（A. D. 1807）年には三、一四九ビーガーとその領域を半分以下に狹めている。しかし、**圖版3**で見るとその領域は廣く、十九世紀後半以降に擴大したのであろうか。なお、S・一九〇九（A. D. 1852）年には新村ドーラットプルを建設し、鄰接する城塞ナーハルガル（Qasba Nahargarh）（同一七二）から村落の導師（gaon guru）二人を招いている。なお、この新村の名は**圖版3**にはみられず、またS・一九一二（A. D. 1855）年の記錄にも見られないから、再びこの市場村に吸收されたのであろう。

なお、市場村大ラームガンジは、都城バーンストゥーニーに鄰接していること、市場村小ラームガンジの母村ビラース（同一四六）は、この時期に都城となった城塞バンワルガル（Qasba Bhanwargarh）（同一二三）とその北側で境を接していること、市場村チャッタルガンジは、その東側で城塞ナーハルガル（Qasba Nahargarh）（同一七二）に接し、その西側には、村を一つ越えてこの時期に都城となったジャルワーラー（同一六二）があることなど、これらの城塞や都城の存在は、市場村の形成・建設との關係においてきわめて重要である。

さて、バーンストゥーニー鄉の新村は、どのような出現の過程をとっているのであろうか。筆者はこの鄉のS・一七八一（A. D. 1724）年からS・一九一二（A. D. 1855）年までのタクスィーム文書のうち、いくつかの年度をとってそこに記載されている村を「センサス・アトラス」のキッシャンガンジ郡の地圖の該當箇所にマークし、地圖を塗りつぶしてみた。ここでは**圖版3**にその名が記されているが、S・一七八一年のタクスィーム文書にはみられない、つまりこの當時まだ出現していない村をチェックしてみると、それらは村番號一〇六、一〇七、一一一、一三八、一四三、一四五、一六三の村である。これらの村のうち、村番號一三八のクーンディー（Koondi）村を除くすべての村は、S・一九一二年のタクスィーム文書のなかにその名を見いだすことができる。また、この鄉の中央部にある村番號一三〇臺前後の村は、その村

域はきわめて小さいが、すべてS・一七八一年までに出現している。このことは、パールバティ（Parbati）川に沿ったこの地域が肥沃で農業生産力が高く、早くから開發されていたことを示すものと考えられる。

さきのクーンディー村を除き、十九世紀半ばには今日その名をみる村がすべて出揃っていることは、この時期までに開墾、開發、新村の建設という生産力の外延的發展が一つのピークに達したことを意味している。もちろん、郡郷によってその時期には若干のズレはあるが、以上の點は都城ディーゴードとその周邊の村、都城バーラーンとその周邊の村などは既に見た通りであり、さきの市場村ガネーシュガンジをもつイターワー郡やその歳市（mela）で有名なチャーンドケーリー村を郷りにもつ都城カーンプルのカーンプル郷でも同様である。當時の市場村（町）の形成と建設、その發展の背後には、こうした農業生産力の發展があったと考えてよいであろう。

それでは、こうした市場村（町）の形成・建設とその發展、同時期に形成されてくる都城と郡都に代表されるこれまでの郡郷の都城との關係をどのように考えたらよいのであろうか。市場村（町）の形成や建設はもちろんのこと、新しい都城の形成もまた、農業生産力の發展を背景にしたものであることはいうまでもないが、ここで重要なことは、市場村（町）とこれまでの舊い都城との關係であろう。

新しく市場村（町）として形成・建設されてくる村は、その多くが舊い都城の分村からの發展か、または都城から土地の一部を得て、あるいはまた都城に郷接して建設されていることである。このような事例は、既にたびたび言及してきた[33]都城カーンプルに郷接し、歳市で有名な市場村チャーンドケーリー（Chandkheri）にみることができる。

この村は市場村といっても、村名の語尾に「ganj」をもっているわけではなく、その形成は十七世紀にさかのぼると考えられる。この村がどのようにして形成されたかは當時の史料がないのでわからないが、郷接する都城カーンプルとの位置關係から考えるならば、都城カーンプルの分村から市場村へと發展したか、あるいは都城カーンプルから土地を得て建設されたかのいずれかであろう。

都城では一般に週市が開かれており、なかには歳市を開催する都城もあった。都城はこういった市（いち）と寺院との深い結びつきをはじめ、人々の出會いと寺院への參拜ならびに遠近を問わず商人や生產者たちの出會いと商品の生產と交換、賣買の場所であった。このチャーンドケーリー村が鄰りの都城カーンプルをさしおいて歳市を開いていることは、この村が都城カーンプルの都市（都城）的機能、經濟的機能を代行しているとみることができる。それはまた、都城カーンプルが都城としての機能とその發展において、その限界に達していたことによるのであろう。

既に指摘してきたように、この時期までに王都ナンドガオン（コーター）、都城ディーゴード、都城バーラーンなどは、實質的には分村を創出し、新村として分離・獨立させてゆく活動を終えていた。このことはその都市（都城）的機能とその發展が、これまでの都城域の枠組みのなかで展開することを不可能にするもので、その打開の方向が求められていたといえよう。それが、都城域に形成・建設されてくる市場村（町）であり、舊來の都城にかわって、新村の創出活動を展開する新しい都城の出現であった。

王都ナンドガオン（コーター）にしても、すでにS・一七七二（A. D. 1715）年ナートドゥワーラー（Nathdwara）の町にある著名なシュリー・ナート・ジー（Shri Nath ji）寺院に對して、コーターの名を聖地ナンドガオン名へと變更し、その地租が寄進されている。[34] 一方では寺院領として、他方では發展の餘地のない狹い都城壁のなかで、新しい生產力の展開にどう對應してゆくかが、當時都城ナンドガオンの重要な課題になっていたものと考えられる。十九世紀初めに形成された都城ラームプラ（Rampura）、さきに見た市場村ドーラットガンジならびに市場村ウメッドガンジは、いずれもこの王都の目と鼻の先に形成・建設されている。市場村ウメッドガンジは、瞬く間に歳市で著名になり、王都の機能を奪っている。[35] これらの市場村（町）と都城は、今日いずれもコーター市の都市域（Urban Area of Kota）のなかにくみこまれているが、ここにもまたコーターの都市（都城）としての新しい、かつ發展の別の形をみることができる。

むすび

十七世紀（あるいはそれ以前）からすでに郡都であった都城は、十八世紀を通じて分村を生み、新村を誕生させていったが、その活動も十九世紀に入る頃から次第に鈍くなり、十八世紀後半にはこれと競合するかのように、新たに都城あるいは「ganj」の語尾をもった市場町（村）が形成されてくることをみた。新しい都城は、その大部分がこれまでの村（本村あるいは分村）の成長、發展によるものであり、市場町（村）の形成もまたそうした村からの發展によるものがあったが、それと並んで既存の村、とりわけ複數の村から土地を得て市場町（村）として建設されたものもあった。

こうした新しい都城の形成や市場町（村）の建設、發展が、當時の經濟的、社會的發展によって生み出されたものであったことは言うまでもない。[36] なかでも、市場町（村）の成立が、舊來の都城の分村から成長、發展したもの、あるいはその鄰接地に建設されたものであったことは、舊來の都城が當時の經濟的、社會的發展を支えきれず、都城としての發展がその限界に達していたことを如實に示している。そうした動きが、また新しい都城の出現を促したものであった。

いずれにせよ、本稿を終るにあたって、二つの大きな課題が殘されることになった。その一つは、舊來の都城がその發展の限界に達していたとすれば、その内部構造はどのような内容をもっていたかを究明することである。また、これまで展開されてきた新舊の都城による新村の創出活動や既存の村から土地を得ての新村の建設といった活動が、十九世紀中葉までにほぼ終了していることは、農業生産力の外延的發展がそのピークに達したことを物語っている。したがって、第二の課題はこうした經濟的發展を前提にした場合、これにつづくイギリス支配下でのインド經濟をどのように理解するかということである。

註

(1) 拙稿「十七～十八世紀北インドにおける都城について」『三田學會雜誌』八二巻特別號—II、一九九〇年、一三六—一五五ページ。

(2) 拙稿 "The Growth of Towns (*Qasbas*) of Southeastern Rajasthan under the Mughals—A Case Study of Jhalrapatan, A. D. 1650–1820—," 亞細亞大學經濟學會『經濟學紀要』第十七卷 第二號、一九九二年、五五—七八ページ。

(3) これに言及したものとして、拙稿「ムガル時代北インドにおけるチャマール社會集團」『カースト制度と下層民』(叢書 カースト制度と被差別民 第一巻)、明石書店、一九九四年(豫定)。

(4) 史料については、拙著『ムガル期インドの國家と社會』春秋社、一九八二年、四〇—四七ページを參照。

(5) Gupta, C. S., *Census of India 1961*, Vol. XIV, Rajasthan, part IX—A, Census Atlas, New Delhi, 1967. Mathur, U. B., *Census of India 1971*, Series 18—Rajasthan, part IX—A, Administrative Atlas and Supplement to Administrative Atlas, Jaipur, 1976.

(6) *Taqsim*s Tafa Harigarh, S. 1772, S. 1780, S. 1781, Basta No. 1/2, Bhandar No. 6.

(7) *Taqsim*s Tafa Kundi, S. 1781, Basta No. 1/2 and S. 1811, Basta No. 3/2, Bhandar No. 6.

(8) *Taqsim*s Tafa Kakurni, S. 1781, Basta No. 1/2 and S. 1824, Basta No. 3/2, Bhandar No. 6.

(9) *Taqsim*s Tafa Deikhera, S. 1780, S. 1781, Basta No. 1/2, Bhandar No. 6. *Jama* Tafa Panwar, S. 1798, Basta No. 51/1, Bhandar No. 1.

(10) *Taqsim* Tafa Binaiga, S. 1781, Basta No. 1/2, Bhandar No. 6. これには、S・一七八六年までの記錄が追記されている。*Jama* Pargana Delanpur, S. 1798, Basta No. 51/1, Bhandar No. 1.

(11) Singh, M. P., *Town, Market, Mint and Port in the Mughal Empire, 1556—1707 (an Administrative-cum-Economic Study)*, New Delhi, 1985, p. 29.

(12) 詳しい考察は、稿をあらためておこないたい。

(13) 拙稿「十八世紀～十九世紀初頭ラージャスターンにおける新村の建設と村落社會の構造」亞細亞大學經濟學會『經濟學紀要』第十六巻二・三號合併號、一九九一年。

(14) *Taqsim*s Pargana Kota (Nandgaon), Basta Nos. 1/1, 1/2, 2, 3/2, 4, 21/2, 21/2, 22/1, 22/2, 23/2, 27, 51, 53, S. 1719—1912, Bhandar No. 6.

(15) 一ビーガー (bigha) は、八分の五エーカーである。

(16) ナードナー村は、今日ではコーター市の都市域のなかにくみこまれている村の一つで、コーター市の最北端にある。Govt. of Rajasthan, *Master Plan for Kota, 1971—1991*, Jaipur, 1977, Map of Kota.

(17) 前掲拙著『ムガル期インドの國家と社會』二二二ページ、第二表を參照。前掲拙稿、"The Growth of Towns

(*Qasbas*) of Southeastern Rajasthan under the Mughals," p. 61.

(18) *Taqsim*s Pargana Mangrol, S. 1866 and Pargana Baran, S. 1864, Basta No. 23/2, Bhandar No. 6. *Taqsim* Tafa Raipur, S. 1846, Basta No. 17/1, Bhandar No. 6. *Taqsim* Tafa Kakurni, S. 1878, Basta No. 27, Bhandar No. 6.

(19) *Taqsim* Pargana Baran, S. 1865, Basta No. 23/2, Bhandar No. 6.

(20) 前掲拙稿「十七～十八世紀北インドにおける都城について」一四六―一四七ページ。

(21) *Taqsim* Tafa Atro, S. 1825, Basta No. 4, Bhandar No. 6.

(22) 拙稿「村・カースト・ヒンドゥー教」『〈シリーズ世界史〈の問い〉五 規範と統合』岩波書店、一九九〇年、一五一―一五二、一五八ページを参照。

(23) *Taqsim*s Tafa Jolpa, S. 1781, Basta No. 1/2; S. 1825, Basta No. 4; S. 1835, Basta No. 7/2; S. 1857, Basta No. 22/1; S. 1865, Basta No. 23/2; S. 1871, Basta No. 25; S. 1878, Basta No. 27; S. 1883, Basta No. 30; S. 1903, Basta No. 53; S. 1912, Basta No. 51, Bhandar No. 6.

(24) *Taqsim*s Tafa Bansthuni, S. 1781, Basta No. 1/2; S. 1851, Basta No. 18/2; S. 1856 Basta No. 21/2; S. 1865, Basta No. 23/2; S. 1877, Basta No. 27; S. 1883, Basta No. 30; S. 1903, Basta No. 53; S. 1912, Basta No. 51, Bhandar No. 6.

(25) *Taqsim*s Tafa Raipur, S. 1847, Basta No. 17/1; S. 1857, Basta No. 22/1; S. 1871, Basta No. 25; S. 1877, Basta No. 27; S. 1883, Basta No. 30; S. 1912, Basta No. 51, Bhandar No. 6.

(26) *Taqsim*s Tafa Bansthuni, S. 1903, Basta No. 53 and S. 1912, Basta No. 51, Bhandar No. 6.

(27) *Taqsim* Pargana Barod, S. 1912, Basta No. 51, Bhandar No. 6.

(28) *Taqsim* Pargana (Tafa) Itawa, S. 1843, Basta No. 12, Bhandar No. 6.

(29) *Taqsim* Pargana (Tafa) Nandgaon, S. 1847, Basta No. 17/1, Bhandar No. 6.

(30) *Taqsim*s Tafa Bansthuni, S. 1903, Basta No. 53 and S. 1912, Basta No. 51, Bhandar No. 6.

(31) *Parwana* from Maharao Shri Ummed Singhji to Shah Danat Rai, Lachhman Das, Salag Ram, Beta Balabh Das Mohomya, S. 1845 in *Toji* File (Docket Cover).

(32) *Parwana* from Maharao Shri Ummed Singhji to Patel and Patwari of Mauza Sagatpur Tafa Nandgaon, S. 1839; *Parwana* from Maharao Shri Ummed Singhji to Patel and Patwari of Mauza Awali Tafa Raipur, S. 1839 in *Toji* File (Docket Cover).

(33) 前掲拙稿「村・カースト・ヒンドゥー教」一五一―一五三ページ参照。

(34) 同右、一五五―一五六ページ。拙稿「十七―十八世紀北イ

ンドにおける政治權力と宗教」（Ⅳ）、亜細亜大學經濟學會『經濟學紀要』第十三卷第三號、一九八九年、二九―八三ページ参照。

(35) Govt. of Rajasthan, *op. cit.*, Map of Kota.

(36) 當時の北インドの經濟的發展については、以下を参照。Gupta, B. L., *Trade and Commerce in Rajasthan during the 18th Century*, Jaipur, 1987. Bayly, C. A., *Rulers, Townsmen and Bazaars—North Indian society in the age of British expansion, 1770-1870—*, Cambridge, 1983. とりわけ、後者はアワド地域（現北部州〈U. P.〉）における市場町の成長・發展を論じた重要な研究である。

of this paper is to show a series of cases of succession to the right of administration of a waqf, which offers some hints to solve the problems mentioned above.

All these cases had been brought many times between 1253 and 1352 by the members of the 'Aṣrūn family, who belonged to the Shāfi'ī madhhab in Damascus, and had been judged under many qāḍīs, who belonged to the different madhhabs. Qāḍī al-quḍāt al-ḥanafī al-Ṭarsūsī (d. 1357) noted and tried to explain about these cases in his work *al-Fatāwā al-Ṭarsūsīya*.

From these cases which he wrote in his work, we see the followings:

1) Qāḍīs judged the cases based on the theory of their own madhhabs. Of course they sometimes judged them within their own discretion.

2) It is certain that there seemed to be superiority between the madhhabs, but there was no superiority between the judgements based on the madhhabs.

3) The difference of the madhhabs which qāḍīs belonged to is not the factor that hindered them from disposing of the cases.

4) There was no relation between the madhhabs which the party supported and those the qāḍī belonged to. In the cases that we have seen, the members of the 'Aṣrūn family chose the different madhhabs at every time. One reason for this may be that the party chose the qāḍī who would pass a desirable judgement for the party's own.

THE FORMATION OF TOWNS (*QASBAS*) AND MARKET TOWNS (OR VILLAGES) IN NORTH INDIA, A. D. 1650~1850

SATO Masanori

The towns (*qasbas*) under the Mughals were the state capitals and county (*pargana*) headquarters in the states of Rajasthan and in the state of Kota in particular. These towns later became the centre of commerce and crafts as well. Besides these towns, a lot of new towns and market towns (villages) with a suffix of "*ganj*" (market) came to appear in the

Kota State from the latter half of the 18th century according to the contemporary Rajasthani revenue records preserved at the Rajasthan State Archives, Bikaner, India.

New towns evolved generally from very big villages on their way to which created several small villages (*dakhil*) and made most of them independent (*asli*), and continued the same process even some time after their formation. Most of these towns were commercial and / or industrial in their character.

On the other hand, market towns (or villages) were either established very near an old town by *patels* (village headmen), merchants or the state by acquiring lands from its neighbouring villages, or they developed from a small village that was attached to an old town.

Thus the formation of new towns and market towns (or villages) denotes clearly that old towns of Kota region had already attained the peak of their commercial and / or industrial activity around the middle part of the 18th century and had no capacity of further development within their existing framework of economic and social organisation. However, it seems that up to the middle part of the 19th century, the activity of establishing new villages had almost stopped, and they had to adopt some new methods of agricultural and industrial production to realize further the economic development of this region.

The economic and social structure of towns and market towns (villages) not discussed here is left as a topic to be studied later.

A PRELIMINARY ESSAY ON POLITICAL STRUCTURE IN SUNG CHINA—TAKING YI 議 AND DUI 對 AS CLUES—

HIRATA Shigeki

This article analyzes yi and dui which played important roles in decision of policies and existed outside the process from design to enforcement of policies, carried out in three departments, that is, Department of Secretariat (中書省 Zhong Shu Sheng), of Chancellery (門下省 Men Xia